東奥日報社提供

東　奥　日　報
2018年（平成30年）8月26日日曜日　（20）

十勝沖地震 教訓に

八戸 発生50年迎えシンポ

市民や防災関係者が地震災害に理解を深めたシンポジウム

1968（昭和43）年の発生から50年を迎えた十勝沖地震を教訓に、今後の防災対策や災害軽減を考えるシンポジウムが25日、八戸市の八戸プラザホテルで開かれた。専門家4人が集まった市民や防災関係者ら約130人に大地震に関する知見を披露し、問題意識や課題を共有した。

県内の大学や八戸市、県などでつくる実行委が主催。4人はそれぞれ、十勝沖地震の建物被害や降雨時の地盤の動き、防災教育などについて講演した。

弘前大学大学院・理工学研究科の片岡俊一教授は、将来、本県太平洋沿岸で大地震が発生する可能性について解説。同沿岸では、1600年代から約100年おきに大地震が発生していることから「今後30年の間に、太平洋沿岸で震度5強以上の地震が発生する確率は高い」と指摘した。

このほか、「過去を見つめこれからを考える―自助・共助・公助」と題したパネルディスカッションも行われた。

八戸市の建設業成田健一さん(56)は「まずは身近なところから地震への備えをしていきたい」と話した。

（大久保拓地）

※「この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです」